

## 行為のなかの意図？

### ——現代現象学とハイデガー——

池田 喬

車で職場に行く途中、ギアを2から3に変える。

テニスをプレイしているとき、飛んできたボールを跳ね返す。

手書き原稿をタイプしているとき、キーボードのFを押す。

道を渡ろうとして、段差を越える。

### はじめに

無意識のように行っていることでも、「何をしているのか」と聞かれれば、私たちは観察によらずに即座に答えられる。観察知とは根本的に異なるこの自己知の存在は、驚嘆の対象になっただけでなく、アンスコム (Anscombe 2004 (1957)) 以来、ある行為がどういう記述のもとで意図的であるかを識別するための基準という、行為論にとって重大な機能を担わされてきた。しかし、サール (Searle 1983) が指摘したように、即答できるという事実を確認することは、意図的であるとはいかなる心的状態なのかを解明することではなく、むしろこうした問いを謎として残す。さらに言えば、この事実を確認することで、その経験のなかに意図と呼ぶにふさわしい何かが含まれていることが確認されるわけでもない。先の謎を探究した結果、自らの行為について非観察的に報告できるという事実はその行為の意図性とは関係ない、となる可能性も残されている。

本稿の目的は、J. サールが「行為のなかの意図 (intention in action)」と呼んだ志向性を現象学的に探究することである。ではなぜ、行為のなかの意図を「現代現象学とハイデガー」なる副題を掲げる考察の対象にするのか。

まず歴史的理由がある。サルは、二〇世紀の哲学界において現象学の専用領域のように語られてきた志向性を論理構造の分析と彼が呼ぶ手法で体系的に説明した第一人者であるのみならず、それによって現象学は用済みになったと考えていた。彼はカリフォルニア大学バークレー校の同僚であったハイデガーの解釈者 H. ドレイファスと、それぞれ分析哲学と現象学の代表者として、行為のなかの意図をめぐる論争を九〇年代から一〇年近く繰り広げた。サル・ドレイファス論争は、行為や志向性への現代現象学的なアプローチを展開するためのよい出発点になる。

次に、本企画に先行して出版された書籍『ワードマップ現代現象学—経験から始める哲学入門—』にある補足をしたいからである。この書で現象学の特徴付けとして挙げられる「一人称的観点」からの「経験」の探究という点は疑いなく、ある哲学が現象学であるための最低条件である(植村・八重樫・吉川 2017, 5-6)。しかし、私見によれば、現象学の決定的特徴は、一人称的経験のなかでもフッサールやメルロ＝ポンティが「黙した」(Husserl, 1950: 77; M-Ponty, 1945: x)と呼ぶ、前反省的・非明示的な水準のそれを探究することにある。つまり、無意識的と呼ばれ、三人称的視点からの科学的探究に解明を任せる他ないよう見える領域を、現象学は一人称的経験に踏みとどまって哲学的に研究するという困難な課題に関わっている。サルが明示的な先行意図から区別した行為のなかの意図はそういう領域に属し、現象学の実力が試されるトピックだと言えよう。

本稿で私は、進行中の行為のなかに、先行意図の類似物としての意図と呼ぶべきものは見出せないという現象学的見解を表明する。しかしこのことは、進行中の行為には何らの意識経験も含まれないとか、これについての現象学は不可能だとかいうことではない。そうではなく、進行中の行為の経験は、意図ではなく知覚の言語によって現象学的によりよく記述できる、という立場を打ち出す。また、ハイデガーの『存在と時間』を私に近い立場をとる現象学者として再読し、意図の概念の軛から解放されることで現象学に出現する探求領域があることを示したい。

## 1. 行為のなかの意図—サル・ドレイファス論争—

まず、サール・ドレイファス論争の内容を「行為のなかの意図」に関わる部分に限定して紹介する。

サールは『志向性』(Searle 1983, Chap. 3)において、意図を「先行意図 (prior intention)」と「行為のなかの意図」に分類した。先行意図は、行為に先立って形成される意図であり、「私は A しようとしている (I am going to do A)」と未来形で表現される。これに対して、行為のなかの意図は「私は A をしている (I am doing A)」と現在進行形で表現される。例えば、車で職場に行こうというのが先行意図である場合、この先行意図が実現するまでになされる、ギアを 2 から 3 に変える、ハンドルを切る、ブレーキを踏むといった一連の行為は「補助的 (subsidiary) 行為」と呼ばれる。これらの補助的行為のセットは先行意図のなかにあらかじめ表象されるわけではない。それぞれの行為はその進行中に、「私は A をしている」こととして経験される。ハンドルを切っていることを経験しているとき、私はハンドルを切ることを意図している。行為のなかの意図の内容は「行為していることでの経験 (experience of acting)」と同一である。

サールは、意図を、知覚、記憶、信念などと並ぶ志向性の一部とみなした。志向的であるとは「充足条件 (condition of satisfaction)」をもつということである。サールによれば、意図の充足条件は、(1) 身体運動の現前と (2) 因果的自己言及である。腕をあげようという意図が充足するのは、腕をあげるという行為が実際に遂行される時、そのときに限る。そして、腕をあげるという行為が実際に遂行される時とは、(1) 腕があがっているという身体運動が出来事として生じており、かつ、(2) 腕をあげようという意図がこの出来事を引き起こしているときである。仮に、腕があがっているのに、この出来事は腕をあげようという意図が引き起こしたものではないとすれば、(反射的に腕があがったのかもしれないが) 腕をあげようという意図が充足された、とは言えない。

サールによれば、先行意図と行為のなかの意図はともに因果的に自己言及的である。明示的に腕をあげようとして腕をあげる場合と同様に、タクシーが通りかかったことに気がついてとっさに腕をあげる場合も、野球選手がボールをつかんで素早く送球するときに腕をあげる場合も、その身体運動が行為である限り、腕をあげようという意図が、腕があがるという身体運動を引き起こして

いるのでなければならない。

ドレイファス (Dreyfus 2014 (1993)) は、サールが先行意図と行為のなかの意図の現象学的な差異を過小評価していると考えた。とっさに腕をあげるときや、ハンドルを切る、ギアを変えるとといった一連の補助的行為のフローに従事しているとき、そのそれぞれの行為について、「～しよう」という意図がある身体運動の出来事を引き起こしているという気づきが含まれる、などということがあろうか。そのような気づきは一人称的経験には含まれていないのではないだろうか。

ドレイファスは、因果的自己言及の経験について疑念を呈するだけでなく、現象学的には、私たちは因果性をむしろ逆向きに経験していると論じる。彼は、進行中の一連の行為に従事することをハイデガーにならって「日常的な没入的交渉」と呼び、そのように行為していることの経験は「環境についての感覚に応答する技能的活動の絶え間ないフローの経験」であるとする (Dreyfus 2014 (1993): 81)。環境についての感覚とは、そのつどの状況が身体と環境の調和的均衡を保っているかどうかについての感覚である。私は、不均衡を感じれば調和を回復し、均衡を保つべく身体を運動させる活動に絶え間なく従事している。この説明は、熟達したスポーツ選手の行為や習慣的行為の例を用いると理解しやすい。テニス選手は、ボールを打とうという意図が打つ身体運動を引き起こすというよりも、そこにボールが来たために手を伸ばし、ラケットが下がりすぎているために持ち上げる、などとよりよく記述されるような一連の経験をしている。ハンドルを切る、ギアを変える、ブレーキを踏むといった一連の補助的行為のフローも、通行人が現れる、道が空いてくる、信号が変わる、といった状況における環境への身体の対処として理解できる。

人の活動は、状況の要求 (demands of situation) に完全に連動している。 (...) その活動を引き起こすものとして自己言及的に自らを経験してはいない。  
(Dreyfus 2014 (1993): 81)

私たちは状況を私たちから行為を引き出すものとして経験する。 (Dreyfus 2014 (1993): 82)

行為していることの経験には「世界から心へ」の因果性の向きもある。サルのように、行為の因果性は「心から世界へ」だと一般的に定義することはできない。

## 2. サールの応答を吟味する

ドレイファスの批判は、サルが因果的自己言及について現象学的な、つまり、一人称的経験についての何らかの哲学的見解を述べている、という前提でなされている。サルによるドレイファスへの応答 (Searle 2001) はこの前提を誤解として退けるものであった。ドレイファスは、サルが「身体運動が行為であるための論理的条件と現象学的条件の両方を説明している」(Searle 2001: 277) と考え、後者の条件を否定しようとする。けれども、サルによれば、彼はそもそも論理的条件についてしか述べていない。「私の行為のなかの意図が私の腕があがることを引き起こすというのは、この意図の(論理的)充足条件がこの意図が私の腕があがることを引き起こすというものだからである」(Searle 2001: 278)。そしてそれだけのことにすぎない。「サルは、主体が、行為のなかの意図と身体運動のあいだの因果的結合を連続的に経験していなければならないと主張する」(Dreyfus 2014 (1993): 79) というドレイファスの理解は誤解であり、この誤解に基づいた批判も的外れだということになる。サル・ドレイファス論争は、進行中の行為の現象学的記述としての適切さを争うものには発展しなかった。

しかし、サル自身の発言を真に受けて、一人称的経験についての現象学的主張はせずに志向性の論理的構造を明らかにするのが彼の哲学なのだと考えるべきなのかどうかははっきりしない。少なくとも、いくつかの点で彼は現象学的としか言いようのない見解を示している。『志向性』の出版から九年後に彼は次の「結びつきの原理 (connection principle)」を主張している。

意識的な志向状態をもちうる存在のみが、そもそも志向状態をもちうる。そして、すべての無意識の志向状態は少なくとも潜在的には意識である。

このテーゼは、心の研究にとって途方もない帰結をもたらす。このテーゼは、例えば、意識の問いを排除するような志向性についての議論はどれも、不完全だということを含意する。意識について議論しなくても、志向的現象の論理構造を記述することは可能である。実際、大体、『志向性』(1983)では私はそのようにした。しかし、意識と志向性には概念的な結びつきがあり、したがって志向性の完全な理論は、意識の説明を必要とするということになる。(Searle 1992: 132 [サール 2008: 204–205])

この「結びつきの原理」の帰結によれば、志向性がどう意識的に経験されるのかに関する説明を欠いて、志向性の論理構造の記述に徹する分析は、志向性の理論として不十分である。そうであれば、意図の志向性についてもその一人称的経験の現象学が必要である。また、この原理に従えば、志向性の充足条件も意識的でなくてはならないはずである。そうであれば、ドレイファスのように、因果的自己言及の経験についての現象学的見解をサールに求めることは不当でない。

この点についてのサールの自己理解は混乱しているように見える。サールは、一方で、「私が試みているのは、それが現象学的に実在するかどうかはともかく、「充足条件」を記述すること」(Searle 2004: 114)だと強調する。例えば、記憶には因果的条件があるが、記憶の因果的条件は一人称的に経験されているわけではない。しかしこのことは、記憶の因果的条件を分析することに影響を与えない。論理構造の領域の多くは「現象学的分析の射程を超えている」(Searle 2004: 114)。他方で彼は、「結びつきの原理」に基づいて、「充足条件は潜在的には意識的である」ことを肯定している(Searle 2004: 121)。ケリーは次のように評している。

もし、因果的自己言及の制約は原理的に意識にアクセスできないということに私たちが同意するなら、結びつきの原理が、そのような制約は志向的状态にとっての充足条件の一部ではありえないと命じることになる。この点は、因果的自己言及は充足条件の一部だというサールの以前からの主張と食い違う。それゆえ、内部衝突を生み出す。(Kelly 2005: 8)

### 3. 意図と呼びうるものがそこにあるのか

結びつきの原理からすれば、進行中の行為において私は自らの意図が身体運動を引き起こすという一人称的な意識経験を（少なくとも潜在的には）しているという見方にコミットせざるをえない。しかし、この考えは現象学的に見て健全なのだろうか。サール・ドレイファス論争はこの問いを私たちに残した。以下ではこの問いを引き受けて、行為のなかの意図の問題を次の段階に進めてみよう。

先に引用した一節を含んだケリーの論文はサール・ドレイファス論争の「ギャップを埋める」という表題をもち、論争の行方を展望する手がかりを与えている<sup>1</sup>。ただし、表題には反して、彼が示している論点のいくつかは明白に反サールのようと思われる。進行中の行為のなかに意図と呼ぶべきものは存在しないという、挑発的な見解を示しているからである。

ケリーは「冷蔵庫の灯の錯誤 (refrigerator light illusion)」として知られる認知エラーに触れている。子どもは、冷蔵庫を開けるたびに灯がついていることから、冷蔵庫が閉まっているときでもつねに灯はついているのだと信じていることがある。この錯誤は、意識の浸透性についての豊かな見解と薄い見解を区別するのにしばしば使われる。薄い見解とは、意識は（目覚めている限り）つねに浸透しているように見えてもそれは思い違いだという見解である (Schwitzgebel 2007)。ケリーは、哲学者の意図の理解についてもこの錯誤の疑いをかける。

ある行為をしようという意図は、その活動に注意を向けたときには明示的になる。それゆえ、この意図は、注意を向けていないときでも、その活動の内容を特徴付ける諸条件の一部であったに違いない。これは没入した活動に関しては、冷蔵庫の灯の場合と同じように、まずい原理である。(Kelly 2005: 20)

このケリーの問題提起にどう応答するべきだろうか。それを考えるために、彼が用いている事例を検討しよう。彼が挙げる例は、キーボードを見ないで書

類をタイプしているタッチ・タイピストが f の代わりに g と打ってしまったケースである。そのとき、このタイピストは「good じゃなくて food と打とうとしていた (intended) のに！」と述べるだろう。ケリーはここで冷蔵庫の灯の錯誤に陥らないように警告を発する。

しかし、単にこの人が何か間違っただけをしたことを事後的に認識できるというだけで、それゆえ、この人は、g をタイプするという実際の活動に従事しているときに f をタイプしようと、そう試行していたとか望んでいたのだと、私たちはなぜ考えるべきなのだろうか？ (Kelly 2005: 20)

サールの概念にもう少し忠実に言い直せば、こうなるだろう。私たちは、事後的な報告に依拠して、この行為者は、g を打っているという行為の進行中に「f をタイプしている (I am typing a f)」という経験をしているというべきなのか。「f をタイプしている」という内容をもつ意図が行為のなかにあると言うべきなのか。さらに言えば、そのとき、「f をタイプしている」という意図がその身体運動を引き起こしている跟自己言及的に経験されているのか。

これらの問いには、二つの大きな問題提起が含まれている。第一に、行為が意図的かどうかの判定のために当人の事後的報告に依拠してよいわけではない<sup>2</sup>。事後的報告は経験を歪めて伝えているかもしれないし、もっと経験に符合した報告があるかもしれない。第二に、存在論的にも重要な含意がある。もし意図の概念を先行意図に限定し、行為のなかの意図は認めないのであれば、意図の外延は相当に小さくなる。ドレイファスは自己言及的な経験を否定したのだから、少なくともサールが言う意味での「行為のなかの意図」についてはケリーとともに、そのようなものは経験には含まれない、と言ったに等しい。すると心の存在論の地図の大きな書き換えに参与していることになる。

#### 4. 意図ではなく注意に基づく説明

##### 4-1 行為のミスをどう説明するのか

心の概念を縮小することは独特の不安を呼び起こす。もし、進行中の行為の

なかに意図と呼ぶべきものはないのであれば、つまり、「fをタイプしようとしていたのにgをタイプしてしまった」のでなければ、gの打鍵がそのタイピストのミスであることを説明できなくなるのではないか。もし、タイピストが実際に「fをタイプしようとしていた」（あるいは、そのときに「fをタイプしている」という内容をもつ意図があった）のでなければ、そして、この意図こそが身体運動を引き起こしたのでなければ、このミスがこの行為者のものであることが理解不可能になるのではないか。このような危惧は理解できるものだろう。

私は、これらの疑問を哲学者がいかにも持ちだしそうなものとして挙げている。日常生活において、gをタイプしたことがタイピストのミスであるために、彼がfを打とうと意図していたことは必要だと人は考えないかもしれない。次のやり取りを比較したとき、どちらが自然に聞こえるだろうか。

A) タイピスト：すみません、fを打とうとしてgを打ってしまいました。  
上司：今回はいいから、次回からは、意図したとおりに行為してくれたまえ。

B) タイピスト：すみません、よく見ていませんでした。  
上司：今回はいいから、次回からは、よく注意してくれたまえ。

日常的表現は、先の不安の表明とは異なり、この行為の事後的報告が意図ではなく注意の言葉でなされること、それによって行為のミスを理解可能にしていることを示唆している。そこで私が提案したいのは、進行中の行為の経験は、意図ではなく注意（知覚）に関する言語でよりよく記述できるという可能性を残しておくことである。

もっとも、冷蔵庫の灯の誤謬が警告していたように、事後的報告が進行中の行為の経験を正確に伝えているとは限らない。だから、日常表現の自然さから、進行中の行為の現象学は意図ではなく注意の経験なのだと結論することはできない。けれども、注意の観点から進行中の行為の経験へと現象学的にアプローチすることに、意図の観点からアプローチするのと同等の権限があるというこ

とは少なくとも言える。

もう一つ、サールが好む例を挙げたい。車で職場に向かおうと先行意図を形成する事例である。ギアを2から3へと変えることなどの補助的行為を次々に行ってサールは職場に到着する...はずであったが、スピードをあげた瞬間、十字路で人を轢いてしまった、とする。彼は先のタイプストと同様に、「ギアを2から3に変えようとしたのに2から4に変えてしまった！」と言うかもしれない。サールによれば、先行的に人を轢く意図は形成していなかったがただ轢いてしまったという「場合でさえ、私は彼を意図的に轢いたのであり、私の行為は彼を轢くという意図によってなされた」(Searle 1983: 84)。しかし、これは私たちがこの運転ミスを理解する現実の仕方からかけ離れている。問題は、ギアを変えるときに彼が意図したとおりに行為しなかったことではなく、車を運転するという先行意図を達成するのに必要な注意を忘れたことにある(自動車の運転により人を死傷させる行為等の処罰に関する法律 第5条)。

日常的表現だけでなく法的理解においても、進行中の補助的行為の経験は注意という観点から捉えられることがある。もし日常のおよび法的な言葉遣いが経験の実情を反映しているのだとすれば(まったく反映していないということはないだろう)、哲学者たちは意図の概念を必要以上にインフレ気味に使いすぎてきたのかもしれない、と疑ってみることもまったく筋違いではあるまい。進行中の行為の現象学的記述をやり直すための動機は十分に与えられている。

#### 4-2 注意とは何か—文脈化された応答的知覚—

ドレイファスとケリーは、こうした事例で注意と呼ばれる知覚を、アフォーダンスの知覚と好んで呼んでいる。アフォーダンス知覚は、対象に対する観察(その形状や色の報告に適した知覚)ではない。むしろ、環境のなかの対象(ドアノブ)を何かをするため(ドアを開けるため)のものとして知覚する。この知覚は行為と独立した作用ではなく、むしろ「世界からの要求への応答」(Kelly 2005, 18)という仕方で、知覚しつつすでに行為していると言ふべき作用である<sup>3</sup>。

ドレイファスは、アフォーダンスへの応答をハイデガーが道具的存在者との配慮的交渉と呼ぶものとしばしば同一視している(Dreyfus 2014 (2005): 116)。

そこで、(アフォーダンス論との単純な同一視を牽制するためにも) 強調したいのは、この交渉を導く知覚としてハイデガーが術語化した「配視 (Umsicht)」は、応答的であるとともに文脈的だということである。ハンマーは釘を打つために、釘は木材を接合するために...といった例で知られるように、行為者は、何らかの目的(先行意図)を眼目として、環境内のさまざまな対象を「~のために」という用途の連関において文脈化し、その文脈のなかで個別の対象を応答(交渉)すべきものとして発見する。この文脈化においては、目下の課題に関連性のない対象は度外視され、知覚の文脈が交渉すべき対象の発見に貢献しうるものへと限定される。

ハイデガーの重要な指摘は、文脈化された応答的知覚において現在進行形の行為が関与している対象は知覚の焦点にはないということだ<sup>4</sup>。これまでの例で言えば、進行中の行為の記述に現れていたキーボード、ギア、ドアノブは知覚の焦点にはなく、焦点はむしろテキスト、前方の光景、ドア自体などにある。応答的知覚は、ある対象に応答するためにその単一の対象に関わるのではなく、状況全体のなかでその対象が行為者にどのようにふるまうように要求しているのかを見抜くものでなくてはならない。逆に、「きちんと注意していなかった」場合には、文脈的不整合が生じており、ある仕方でふるまうように要求している対象が適切に知覚されていない、と言える。例えば、書類の字とキーボードのキー、前方の光景とギアなどを、先行意図の達成に必要な文脈的関連付けにおいて知覚し損ねている。スマートフォンを見ながら自転車に乗っていて電柱にぶつかったり、通行人に「気をつけろ!」と怒鳴りつけられたりするときには、自転車で移動するのに必要な文脈を知覚が欠いている。文脈化という観点から言えば、行為中の注意とは、(Umsicht が時折そう訳されるように) 周囲環境へと「目配り」することであり、一点を凝視するような見方は注意ではなく不注意の一種である。

日常的で習慣付けられた行為のフローにおいては、知覚の文脈化はたいいてい破綻なく進行している。しかし、非日常的で未経験の状況に遭遇することもある。そのとき、応答的知覚の文脈化は困難な課題になる。例えば、地下鉄のホームを歩いていると、目の前を歩いていた人が線路に転落したとする。この人を助けようという先行意図を形成するが、車で職場に向かうときや書類をタイ

プするときのような日常的な場面とは異なり、誰であれ、この先行意図を達成するような一連の行為を熟知のものとして習得したことはない。ブラウンスタインとマドゥヴァは、てんかんの発作が起こった最中にNY市営地下鉄の線路に転落した人物の命を救い、「地下鉄の英雄」と呼ばれることになったウェスリー・オートリー（Wesley Autrey）についてこう述べている。

オートリーは線路に自ら飛び降り、電車が頭上数インチ上を通り過ぎるあいだ、その男の体を押さえた。ほかの英雄たちと同じように、オートリーは、後に、自分はその状況に対して瞬間的に「ただ反応した」だけだ、と述べた。オートリーのふるまいは、勇気ある行為者の典型である。勇気ある行為者は、先立って考えたわけではなく、困難な何かをしようと思意することもなく、自らの意志決定プロセスへの気づきもなく、「ただ反応する」。しかし、英雄が倫理的行為の模範であることはたしかである。（Brownstein and Madva 2002: 85–86）

ここで英雄的行為は、意志決定プロセスへの気づきはなく、「その状況に対して瞬間的に「ただ反応した」と記述されている。（助けようという先行意図は、もしかするとあったかもしれないが、）飛び降りようという意図が身体運動を引き起こし、押さえつけようという意図が身体運動を引き起こした、といった因果的自己言及の一人称的経験は生じていないことを本人が強調している。さらに、他人にとっても、彼の経験が「状況に対してただ反応した」ことであることは、この行為の主体が彼であるとみなすことを困難にするわけではない。むしろ、彼は賞賛に値する行為をしたという点について人々は一致している。

応答的知覚が文脈的であるという論点は、英雄的行為の神秘化を避けることができる。彼の状況への応答が驚嘆すべきなのは、未経験の状況において知覚を文脈化しつつ環境に応答したからだと説明できる。すなわち、電車～線路～男などを文脈化し、線路と電車の隙間を、男を押さえつけておく空白として知覚する行為などと記述し直せば、それがいかなる偉業であるかがわかる。

進行中の行為における注意と呼ばれるものは、文脈的かつ応答的な知覚として、空間的に組織化されている。しかしそれだけでなく、英雄的行為が「瞬間

的」になされたことを重要な特徴としているように、時間的にも文脈化されている。

## 5. 先行的意図と配視の時間性—ハイデガー『存在と時間』再読—

先行意図と進行中の行為の時間的關係についてハイデガーは重要な議論を提供しうる。この点に限って『存在と時間』を再読しよう。

ハイデガーは、行為のなかの意図や日常的な技能的交渉の議論で挙げられたような、日常的で馴染みの行為を道具的存在者との配慮的交渉（以下、日常的行為）と呼ぶ。他方、「行為（Handlung）」や「状況（Situation）」といった概念は、「決意した（entschlossen）」と呼ばれる行為者のふるまい（以下、決意的行為）を記述するためにリザーブされる。先にタイピングや車の運転のような日常的行為と英雄的行為を、状況への親密さと知覚の文脈化の困難さによって区別した。ハイデガーは二つのタイプの行為は時間性の観点からも区別できると考える。

ハイデガーの非本来的（かつ日常的）な時間性の議論によれば、先行意図の形成は、未来の自分を何らかの仕方で「予期すること」（SZ: 337）である。予期とはその未来を待つことであり、先行意図はその未来が到来するまで保持される。この点は、マクダウェルがサールに向けた疑念に関する。サールの議論では、私の未来への意図の狙いが道を渡ることである場合、道を渡り始めるとともに当初の先行意図が行為のなかの意図をそのときどきに生み出し、行為のなかの意図は道を渡るために起こるべき身体運動に向けられる（McDowell 2001: 2; Searle 1983: 94）。これに対して、マクダウェルはもっと単純な描像をとることを勧める。先行意図が実行される時、先行意図とは別のアイテムとしての行為のなかの意図が生み出されるのではなく、むしろ先行意図が行為のなかの意図に「なる（become）」。道を横切ろうという先行意図をもつ場合、それが行為に移されてからも、行為が完了するまで、人の意図は道を横切ることに向けられているのであり、起こるべき身体運動に向けられるわけではない（McDowell 2001: 3）。行為を行っている最中の意図も「足を上げること」などではなく、依然として「道を横切ること」にあると言うべきである。先行意図

がこのように行為のなかの意図になるために発動されるのは、元の道からどれくらいまで来たかなどの「時間の経過を追う能力」(McDowell 2001: 5) であって、意図が身体運動を因果的に生み出すことの経験ではない。

ハイデガーは、行為の進行中でも狙いは先行意図にあること、予期される未来の状態はたいてい道を渡るくらいの中規模の時間スケールのものであること、私たちは行為を始めるや否や個別の身体運動に経験のフォーカスを移動させたりはしないことに同意するだろう。むしろ、ハイデガーによれば、進行中の現在は存在者を「現在化すること (Gegenwärtigen)」という仕方でも経験される。そのつどの現在において人は世界の対象に向けられているのである。そして、ハイデガーはマクダウェルと異なり、行為のなかの意図という概念をそれでも維持する必要性を感じていない。現在の時間図式は「ために (Um-zu)」(SZ: 365) だとされるように、存在者の現在化とは存在者の配視的発見である。奇しくもマクダウェルが時間の経過を追うことを実際には空間的な距離感で表現しているように、現在の経過を追うことは先行意図に関連した世界の変化を知覚的に現前化することである。もちろん、その知覚的現前には自らの身体的位置や運動も含まれるだろうが、破綻なく行為が進行している限り、それらの身体運動は、道半ばで車が来るので走るとか、段差があるのでゆっくり足をあげるなど、文脈化された知覚の応答的ふるまいの一部としてそのつど経験される。

もっとも、段差がかなり高くて「足をあげよう」という意図が身体運動の現前を引き起こしているように経験される場合もあるかもしれない。しかし、それは先行意図の実現に向かう時間の経過を追うという点では、労力を取られた停滞として経験されるだろう。ここで、ドレイファスが、サールの行為のなかの意図は W.ジェームズが「努力の感情」と呼ぶものに相当すると述べていることが重要になるかもしれない (Dreyfus 1991: 56; James 1920: 151–152)。ジェームズによれば、see と look, hear と listen などの違いに現れているように、努力の感情の有無が、単に受動的に感覚していることと行為していることの経験を区別する。もしそうであれば、進行中の行為における因果的自己言及の経験は、行為がうまくいかず、(よく見えないときやよく聞こえないときに、see から look へ、hear から listen へと経験が変化するように)「世界から心へ」から「心から世界へと」経験の向きが逆転するときに生じる、努力していることの経験とし

て分類され特徴付けられるかもしれない。あるいは、高い段差を目前に見出したときには、一連の行為のフローが断たれ、「足をあげよう」という（足の細かな動作が補助的行為となるような）通常よりも時間的スケールの小さな先行意図を形成した、と記述し直して、この先行意図の実現に努力の性格を認めるのが、経験に忠実なやり方かもしれない。これらが正しければ、行為のなかの意図が浸透的でデフォルトの経験でないことははっきりする。（なお、再確認すれば、努力の感情がなければ単に受動的な感覚しか残らないなどということはない。see と呼ばれるものが現象学的に分析すれば、応答的かつ文脈化する活動であることはすでに見た。）

しかしなぜ、現在進行形の行為のそれぞれに意図が含まれると仮定したくなるのだろうか。その主要な理由は、私たちはいつでも聞かれれば何をやっているのかを観察によらずにたしかに答えられることがある。しかし、ハイデガーの議論に基づけば、このことは、私たちが先行意図を形成するとき、その実現のために役立つような環境内の対象がどのように入手可能かをあらかじめ勘案している、という事実を反映したものにすぎない<sup>5</sup>。道を渡ろうとするとき、私は、信号、道路、車や人の流れなどを配視的に斟酌して未来の状態を予期する。そして、道を渡り終えるまで、私は、そのつど道路、車、段差などを「～するためのもの」として目前に知覚している。私は、「今、段差を越えているところ」などと答えるために、意識を振り返る必要はなく、ただ自分が何をどう知覚しているかを語りさえすればよい。このように考えるとき、観察によらない（アフォーダンス知覚も配視も観察ではない）からといって、自己知に神秘的な要素はまったくない。

他方、「状況にただ反応した」と強調する英雄的行為者の特徴は、何が利用可能であるかが事前に不明な状況で、今、交渉すべき対象を即座に見抜き、それに応答していることである。ここで「ただ反応した」と呼ばれるようなふるまいは、ハイデガーが本来の自己の決意的行為として語っているものに当てはまるように見える。

（日常性の主体である）世人に状況は本質上閉ざされている。世人はただ《一般的情勢》しか知らない。（...）決意性は、情報を得て、状況を思い浮べる

のではなく、すでに自らを状況へと置き移している。決意したものとして現存在はすでに行為している。(SZ: 300)

決意しつつ、現存在は頹落からまさに自らを取り戻して、開示された状況への《瞬間的な見抜き (Augenblick)》においてますます本来的な仕方でも《現に》存在しようとしている。(SZ: 328)

ハイデガーは、状況を瞬間的に見抜く応答としての大文字の「行為」には日常的行為（配慮的交渉）と異なり、確定的な先行意図はないと考えているようである。むしろ、未来の図式である「目的であるもの (Worumwillen)」はその行為者がどうありうるかという自己のユニークな存在それ自体である。このような「目的」は内容的に極めて薄い。そのため、先行意図のように予期すべき未来の状態を確定的に表象しない。しかしだからこそ、英雄的行為の説明には適している。なぜなら、この場合に際立っているのは、その人物が日常的行為のように確たる未来の意図をもたずに（あるいは顧みずに）遭遇した状況に応答したからであり、それゆえ、人々はその人物自体のあり方（例えば、勇敢さのような徳）がこの行為の目的（根拠）だと捉えるのだろうか<sup>6</sup>。

## 結びに代えて

古典現象学者のなかでもハイデガーは、他とは比較を絶するほど徹底してメンタリストティックな語彙の消去を推し進めた哲学者である（『存在と時間』には、意識や心も、意図や記憶などの概念も現れない）。意図的なものを先行意図に限定し、存在論的に大幅に儉約しようとしたドレイファスやケリーの試みは、その意味でハイデガーの現代現象学的な継承として位置付けられる。

現象学は党派ではなく、一人称的経験に踏みとどまって哲学的トピックに解明を与えようとする活動であり、現代現象学は同時代の (contemporary) の哲学と話題を共有しつつこの活動を営むムーブメントである。本稿で扱ったのは、その現代現象学の一つのアプローチでしかない。同じ志向性の問題を「現象学的に」扱っていても、フッサール（やその他の現象学者）の立場に立脚した現

象学者が論じれば、見解に違いが生じる。このことは何らの問題でもなく、現象学が、ほかのまともな学問と同様に、見解の相違を明確にし、必要な修正があれば自説を撤回するような研究活動であることを示しているだけである。私と植村氏が「行為のなかの意図」をめぐる異なる立場から議論を交わした、このテーマレクチャーの企画がその証左になるだろう<sup>7</sup>。

## 註

1. ケリーはサールとドレイファスの両者に学んだ。サールのドレイファスへの応答論文にはケリーへの謝辞がある一方 (Searle 2001: 284), ケリーはドレイファスと共著論文を著している。
2. アンスコムは、事後的な行為の正当化の分析に適したものであり、進行中の行為の分析には適さないことは、例えば、ギブソンのアフェードダンス理論がもつ哲学的インパクトをシリアスに受け止めた論者たちが指摘してきた (Cf. 染谷 2006)。
3. ノエ (Noë 2004) は、この発想を徹底して、知覚を本質的に行為活動的なものとみなし、「知覚とは一種の熟達した身体活動である」としている。『現代現象学』において八重樫は、知覚経験と身体的行為を別の種類の経験として分類することは無効にならないことを指摘している。例えば、知覚経験が受動的であるのに対して意志と行為は自発的な経験であるという事実があるためである (植村・八重樫・吉川 2017: 59-60)。ドレイファスであれば、この区別は、先行意図によって特定されるスケールの行為についてはあてはまるが、進行中の行為のフローについてはあてはまらないと言うだろう。というのも、彼の論点は、後者の経験においては、行為と知覚の因果性と適合の向きは逆転して経験されるということだったからである。しかし、彼も身体的行為と知覚経験の区別を放棄したわけではない。
4. 道具的存在者がその自体存在において出会われることは、道具的存在者が「目立たなさ (Unauffälligkeit)」から踏み出ないことを含む (SZ: 75; 池田 2011: 35)
5. 「現存在は自らの最も固有で拘束のない存在可能において第一次的に自らに到来するのではなく、配慮しつつ、配慮されたものが許容したり拒絶したりするものの方から自らを予期する。」 (SZ: 337)
6. このような私の解釈は、ハイデガールのこの箇所の議論がアリストテレスのプロネーシス解釈から生まれてきたことを補足すれば穏当なものであることがわかる。例えば、『存在と時間』の二年前に行われた 1925 年夏学期講義『ソフィステス』における、『ニコマコス倫理学』の解釈において、ハイデガーはプロネーシスを「私が選択 (προαίρεσις) においてそれへと決意する善 (αγαθόν)」 (GA19: 65) と「私がそこから、それへと決意する行為の具体的状況 (konkrete Lage)」 (GA19: 65) を二重に暴露すると述べている。
7. テーマレクチャーの当日には様々なご意見やご批判を頂いた。その後、原稿提出日まで執筆に専念する時間をついに見つけることができず、それらへの応答をこの原稿に盛り込むことはできなかった。この文章は、当日の配布資料に誤字脱字の修正を少々加えただけのものである。この点について、企画関係者と当日の参加者の皆様にお詫

び申し上げたい。

### 参考文献

- Anscombe, E. 2004: *Intention* (1957), 2<sup>nd</sup> edition, Cambridge, MA: Harvard University Press. [アンスコム『インテンション——実践知の考察——』菅豊彦訳, 産業図書, 1984]
- Brownstein, M. and Madva, A. 2002: Ethical Automaticity, *Philosophy of the Social Sciences* 42(1), 68–98.
- Dreyfus, H. 1991: *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, Cambridge, MA/London: The MIT Press. [ドレイファス『世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学——』門脇俊介監訳, 産業図書, 2000年]
- Dreyfus, H. 2014: “Overcoming the Myth of the Mental: How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise (2005), in Wrathall, M. (ed.) *Skillful Coping: Essays on the Phenomenology of Everyday Perception and Action*, 104–124, Oxford: Oxford University Press.
- Dreyfus, H. 2014: “Heidegger’s Critique of the Husserl/Searle Account of Intentionality” (1993), in *Skillful Coping: Essays on the Phenomenology of Everyday Perception and Action*, 76–91.
- Heidegger, M. *Sein und Zeit* (=SZ), 17 Aufl., Tübingen: Max Niemeyer, 1993.
- Heidegger, M. *Platon: Sophistes*, Gesamtausgabe Bd. 19 (=GA19), Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1992.
- Husserl, E. 1950: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, Husserliana vol.1, Den Haag: Martinus Nijhoff. [フッサール『デカルト的省察』浜渦辰二訳, 岩波書店, 2001年]
- 池田喬 2011: 『存在と行為——ハイデガー『存在と時間』の解釈と展開——』創文社.
- James, W. 1920: “The Feeling of Effort,” in *Collected Essays and Reviews*, New York: Longmans, Green and Co., 151–219.

- Kelly, S. 2005: Closing the Gap: Phenomenology and Logical Analysis, *The Harvard Review of Philosophy*, vol. 13 no.2, 4–24.
- McDowell, J. 2011: “Some Remarks on Intention in Action,” *The Amherst Lecture in Philosophy* 6, 1–18.
- Merleau-Ponty, M. 1945: *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard. [メルロ＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内芳郎・小木貞孝訳, みすず書房, 1967年]
- Noë, A. 2004: *Action in Perception*, Cambridge, MA/London: The MIT Press. [ノエ『知覚のなかの行為』門脇俊介・石原孝二監訳, 春秋社, 2010年]
- Schwitzgebel, E. 2007: “Do you have constant tactile experience of your feet in your shoes? Or is our experience limited to what’s in attention?” *Journal of Consciousness Studies*, 14, No.3, 5–35.
- Searle, J. 1983: *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge: Cambridge University Press. [サール『志向性——心の哲学——』坂本百大訳, 誠信書房, 1997年]
- Searle, J. 1992: *The Rediscovery of the Mind*, Cambridge, MA/London: The MIT Press. [サール『ディスカバー・マインド! ——哲学の挑戦——』宮原勇訳, 筑摩書房, 2008年]
- Searle, J. 2001: Neither Phenomenological Description Nor Rational Reconstruction: Reply to Dreyfus, *Revue Internationale de Philosophie* 2001/2 n°217, 277-297.
- Searle, J. 2004: Toward a Unified Theory of Reality: An Interview with John Searle, *The Harvard Review of Philosophy*, vol. 12, 93–135.
- 染谷昌義 2006: 「エコロジカルな行為論——生態学的観点から見た行為と意図性——」, 『UTCP 研究論集』第7号, 61–78.
- 植村玄輝・八重樫徹・吉川孝 2017: 『ワードマップ 現代現象学——経験から始める哲学入門——』第二章, 新曜社.